

「豪州産Wagyu」の生産の特徴と日本への影響

研究員 福田彩乃

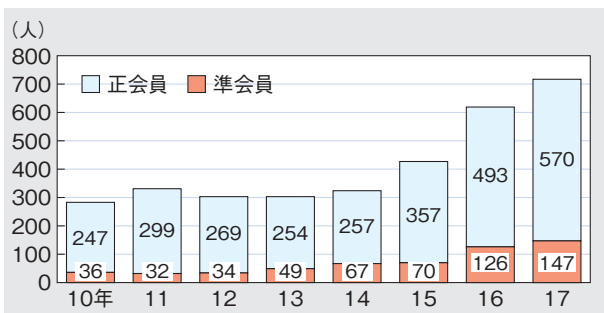
和牛(黒毛和種等)とアンガス種等との交雑種が中心の「豪州産Wagyu」について、豪州Wagyu協会(Australian Wagyu Association)の報告書等をもとに、生産の特徴と日本への影響をみる。

1 「豪州産Wagyu」の生産拡大

豪州Wagyu協会は豪州に35以上ある肉牛品種登録機関の一つで、1989年に設立された民間団体である。同協会の構成員は「Wagyu」の種畜、繁殖、肥育に従事する生産者(正会員)と関連企業(準会員)で、ここ数年は正会員が特に増加している(第1図)。

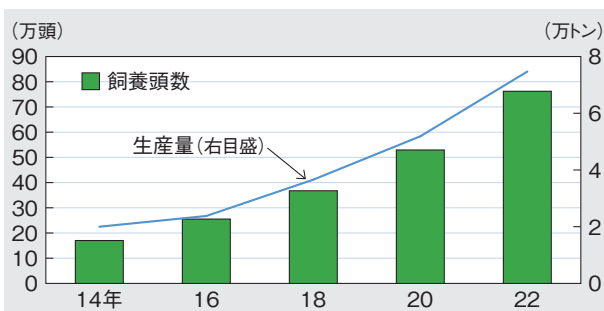
会員対象のアンケートや主要輸出企業の出

第1図 豪州Wagyu協会の正・準会員数



資料 Australian Wagyu Association “Annual Report”を基に作成

第2図 「豪州産Wagyu」の飼養頭数と生産量(推計)



出典 Australian Wagyu Association “Annual Report”
(注) 20年以降は予測。

第1表 Australian Agricultural Companyの概要

創業	1824年
年商	3億8,440万豪ドル
総面積	720万ha
飼養頭数	65万頭
農場数	21か所
フィードロット数	2か所
年間輸出頭数	24万頭
従業員数	500人

資料 Australian Agricultural CompanyのHP等を基に筆者作成

荷量等を基にした同協会の推計によると、2016年の「豪州産Wagyu」の飼養頭数は26万頭、生産量は2.4万トンで、生産量の9割が輸出向けである(第2図)。輸出先は穀物肥育されたアンガス種等と同様にアジア諸国が中心で、輸出先の所得上昇に伴って高級牛肉のニーズが高まり、同協会は22年までに飼養頭数が76万頭、生産量が7.4万トンへ急拡大するとみている。

「豪州産Wagyu」の最大の生産者であるAustralian Agricultural Company(第1表)のここ十数年の動向をみると、06年に「豪州産Wagyu」の大手種畜生産者(Westholme Wagyu)を買収し、高級牛肉の生産強化を図っている。また、14年に自社食肉処理場を稼働させ、生産から加工、販売まで一貫して取り組むことで安定供給している。

2 遺伝的能力の向上

豪州Wagyu協会の主な業務は、種畜生産者が種雄牛や精液等を繁殖生産者に販売するのに必要な血統証明書の発行である。

また同協会はBREEDPLANと呼ばれる遺伝的能力評価システムで個体ごとの能力を数値化し、種畜生産者の遺伝改良を下支えしている。協会によると、ここ10年で「豪州産Wagyu」の平均的な増体、脂肪交雑、枝肉重量に関する遺伝的能力は向上傾向にあるという。

3 日本国内で「Wagyu」の表示はできない

「豪州産Wagyu」は00年代前半まで主に日本へ輸出されていた。しかし、国産と外国産を区別する表示ルールがなく、「Wagyu」も国産とイメージする消費者が多かった。

そこで、農林水産省は07年に「和牛等特色ある食肉の表示に関するガイドライン」をとりまとめ、日本国内で「Wagyu」と表示できるのは、「和牛(黒毛和種、^{あかげ}褐毛和種、日本短角種、無角和種)の純粋種あるいは和牛間の交雑種で、日本で出生し、飼養された牛」とした。したがって「豪州産Wagyu」は、日本国内で「Wagyu」と表示できず、「豪州産Wagyu」の生産拡大が影響を及ぼす可能性があるのは、日本の輸出先である。

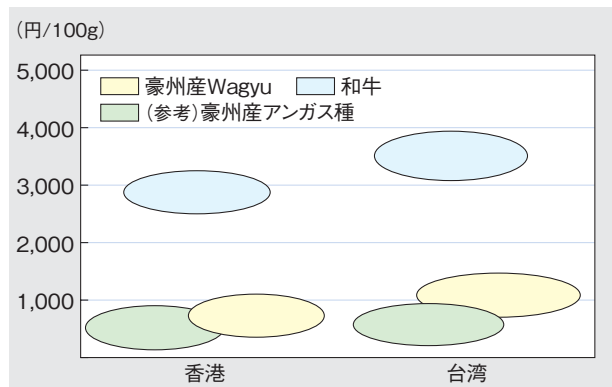
4 「豪州産Wagyu」と和牛のすみ分け

日本の主要輸出先である香港・台湾での「豪州産Wagyu」と和牛の平均小売価格(100gあたり)を比較したのが第3図である。豪州産は1,000円前後に対して、和牛は3,000~4,000円である。公表資料によると、豪州産は長い年月をかけて構築した卸売業者等との関係性を強みとし、一定の品質、相対的な低価格設定、安定的な供給量で消費の裾野を広げている。一方、和牛は高級感を強調し、一部の富裕層をターゲットとしている。

5 豪州以外での「Wagyu」生産もみられる

「豪州産Wagyu」と和牛の価格差は3倍以上と大きく、当面はすみ分けが維持されると

第3図 香港と台湾における和牛と「豪州産Wagyu」の小売価格の分布



資料 日本畜産物輸出促進協議会(2017)、日本貿易振興機構(2018)「品目別現地市場価格調査」等を基に筆者作成

みられる。

ただし、ここ10年で「豪州産Wagyu」の改良に進展がみられる。また、豪州や米国等から導入された遺伝資源を利用して、ヨーロッパ諸国でも「Wagyu」生産が行われている。例えば(公社)畜産技術協会の報告書によると、イギリスでは一部の企業が遺伝資源を確保し、独自に「イギリス産Wagyu」の育成・肥育方法を確立しているという。ドイツではEUで最大のドイツWagyu協会が設立され、会員数は150を超える。

こうした動きが今度どのように広がりを見せるのか、またそうしたなかで、和牛はどのように付加価値を維持しながら輸出先で展開していくのか注目する必要がある。

<参考文献>

- ・伊藤久美・西村博昭(2015)「豪州のWagyu生産および流通の現状」『畜産の情報』3月号
- ・大呂興平(2012)「オーストラリアにおけるWagyu産業の展開」『人文地理』第64巻第4号
- ・大呂興平(2015)「オーストラリア産Wagyuの現状 日本への輸出可能性」『農業と経済』4月号
- ・畜産技術協会(2019)「Wagyu肉生産・流通等実態調査事業」
- ・日本畜産物輸出促進協議会(2017)「今後の牛肉輸出に向けた海外マーケット調査報告書—中华民国(台湾)—」
- ・農林水産省(2015)「海外の牛肉マーケットにおける『都道府県ブランド』の意義及び『和牛統一マーク』使用の効果に関する調査報告書」

(ふくだ あやの)